～歴史ある日本橋の地で老舗企業との連携をさらに生かした地域活性化を～

転職で気づいた“お客さまの笑顔を見ることで自分自身も笑顔になれる”ホテル業の魅力

明治 24（1891）年、『上総屋旅館』として東京・日本橋に創業した『ホテルかずさや』、創立 130 年を迎えた。初代は長野出身、当時、絹製品の素となる養蚕で財を成し、東京で旅館を経営することを夢みて上京、上総屋旅館の亭主に出会い、故郷の財産をすべて処分し、以来、今日まで宿泊業を営んでいる。2020 年夏、ホテル新築により新規オープン。今回は大病を患い、いっときはホテル業界から離れたものの、“笑顔”あふれるホテル業の魅力を再認識し、『新生かずさや』とともに新たなホテル人生を踏み出したのが三賀雅仁支配人にお話を伺った。

ホテルかずさや
支配人
三賀 雅仁 氏
〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-7-15
URL：https://www.h-kazusaya.co.jp/

ホテル業を決めた旅館に務めていた父の姿

石原　三賀支配人との出会いは私がヨコハマ グランド インターコンチネンタル ホテルに務めているときでした。当時の横浜のホテル群は法人営業などでどうしても東京に勝てない状況でした。そんなとき、東京に負けないホテルセールスをしようと HSN（ホテル・セールス・ネットワーク）会を立ち上げ、その会合に参加するメンバーの一人に、当時は横浜ベイシェラトンホテル&タワーズの営業を担当されていた三賀支配人がおられました。以来からのおつきあいとなるのですが、はじめに、そもそもホテル業界の道を選ばれた経緯をお聞かせください。

三賀　きっかけは父が旅館に務めていたことです。父は富山の旅館で働いていたのですが、幼いころより父が働いている姿を見て、楽しそうだなと思い、自分がホテルマンとして働く姿を漠然とではありますが、心に描いていました。人と話すことが大好きで、幼いころより人を喜ばせたり楽しませることを考え、実際に行動することが大好きでした。その結果が今の職業につながったんだと思います。学生時代の就職活動でもホテル業界以外は興味がありませんでした。

石原　横浜時代は営業マンとしてはライバルでした。私はお弁当やコーヒーの発注など細かなケータリングの受注も含めて年間 650 件の担当記録がありますが、三賀支配人も年間 380 件の宴席を獲得されたという、素晴らしい実績をお持ちです。三賀支配人はライバルホテルであるヨコハマ グランド インターコンチネンタル ホテルで行なっていた団体の賀詞交歓会に 3 年間も参加し続け、ついには顧客のハートをつかまれたこともありましたね。

三賀　お客さまにホテルを選んでいただいたことは本当にうれしかったです。ところが、そのお客さまの新年会のときです。年末年始の多忙な中、私が体調を崩してしまったのです。体調がよくないことは気づいていましたが、お客さまから“顔色が良くないから帰りなさい”と言われ帰宅したところ、そのまま倒れて 2 ヵ月半の入院となりました。髄膜炎でした。結果、以来、約 1 年の休職を経て復帰し、宴会予約を約 5 年担当し、数々のホテルイベントに携わりました。

建設業で学んだ設備運用やメンテナンス

石原　復帰されたあと、いったんホテル業界を離れましたね。

三賀　ホテル最前線の営業として仕事に打ち込んでいた矢先に大病に伏し、自身、フラストレーションも感じましたが、病気のおかげで気づかされたことがありました。それは家族、上司、同僚への感謝の気持ちでした。仕事は決して一人ではできない、自分は周りの方々に支えていただいているからこそ働けているのだということを痛感したのです。

石原　私もそんな時代がありました。自分がとってきているんだという気持ちが強すぎてしまい、周りのことが見えていませんでした。そんなとき、当時の GM に呼ばれ“ホテルは宿泊と料飲が軸であり、営業はサポートに過ぎないんだ”と。宿泊と料飲のスタッフが気持ちよく仕事ができるよう配慮をしなくてはならないことを 20 代の後半に忠告されました。

三賀　復帰後、病気から学んだことを胸に仕事に取り組みましたが、これを機に心機一転、新しい仕事にチャレンジしたいと思っていたところ、家族ぐるみのお付き合いをしていた建設業界の社長からお声を掛けていただき、大病後の体のリハビリも兼ねて建設業界に転職したのです。大手・中小のゼネコン営業や現場管理者としてホテルやオリンピック関連の施設、マンションや商業施設の建築に携わりました。人手が足りないときには現場作業にもかかわり、素人ながらに施工も行なっていました。この経験により結果としてかずさやの設備運用やメンテナンスに大いに役立つことになったのです。と同時に、3 年間、外から見たホテルという仕事にさらに魅力を感じるようになったのです。

石原　現場から見てホテル業界はどのように映ったのですか。

三賀　ホテルにいらっしゃるお客さまとの対話や、そこから生まれる笑顔を見ること、また、そういったお客さまの笑顔を見ることで自分自身も笑顔になれる。私はそんな仕事が大好きなのだということに気づかされたのです。

地元小学校に向けた「花育」や胡蝶蘭風呂など実施

石原　そして創業 130 年の歴史あるホテルの新装オープニングメンバーの一員として再挑戦されたのですね。

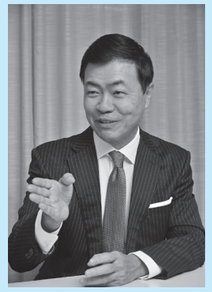
三賀　『新生かずさや』は 154 室の客室と直営レストラン 1 店舗、1 宴会場、大浴場を備えています。江戸の伝統を引き継ぎ、お客さまをお迎えする宿泊業に携わってこられたことを慶びとし、4 代目工藤社長がけん引しています。工藤社長は地域とのつながりをとても大切にしています。その思いを胸に日本橋地区の小学生の子どもたちに向けた「花育」のイベントを行なったり、話題性という点では胡蝶蘭をふんだんにお風呂に浮かべた「胡蝶蘭風呂」や、創業者が長野出身というつながりから「リンゴ風呂」を開催したりと、さまざまな取り組みをしています。

石原　地域との共生にホテルが積極的に取り組むことは、地域活性化のためにも素晴らしい試みです。最後にひと言、熱い思いをお聞かせください。

三賀　歴史ある日本橋の地で、古くから築いてきた老舗企業との連携をさらに生かして、地域活性化の一助となるホテルを作っていきたいと思います。ホテルにいらしてくださるお客さまには、ホスピタリティあふれるおもてなしの心で「くつろぎの時間」をお過ごしいただける温かな場所を提供し、地域からもお客さまからも愛されるホテルを目指していきたいと思います。

石原　大病をきっかけにホテル業界の魅力を再発見されたことは大きな収穫だったと思います。笑顔を大切にこれからのさらなるご活躍期待いたします。

㈱ホスピタリティ デザイン 横浜
代表取締役　石原 健 氏



URL：https://www.hospdy.com/

〈プロフィール〉桜美林大学経済学部卒業／日本ホテルスクール卒業／ホテル産業経営塾卒塾（第一期生）。ホテル センチュリー ハイアット（現ハイアットリージェンシー東京）で 4 年のキャリアを積み、1989（平成元）年、ヨコハマ グランド インターコンチネンタル ホテルの開業準備室に、第 1 期生として入社。開業後は主にセールスとして活動。39 歳で販売担当部長となり、宿泊、宴会、婚礼、レストラン、イベント等の全ての販売を行なう。国内外からの VIP に対するおもてなしを行ない、4度にわたる皇室接遇担当の栄誉も授かる。また横浜青年会議所（JCI）のメンバーとしても活動し、2004 年には 100%出席賞を受賞。東日本大震災後、ウェスティンホテル仙台へ赴任、セールス&マーケティング部長として、総支配人の不在時には代行も務め、3 年 2 カ月間復興支援の一端を担う。2014（平成 26）年、㈱ ホスピタリティ デザイン 横浜 を設立、代表取締役に就任、現在に至る。厚生労働省 事業検討会委員、ホスピタリティ教育研究会 会長、産業能率大学 兼任教員など、宿泊・サービス業界団体や学校、企業などで活躍中。